東京音楽大学創立111周年記念オペラ公演「La Bohème（ラ・ボエーム）」

2017年10月21日（土）・22日（日）
東京音楽大学A館100周年記念ホール

東京音楽大学の総合力が発揮されるオペラ公演。大学院生や学部生から、付属高校生、付属幼稚園児、社会人講座受講者など、数多くの本学関係者が歌い、オーケストラも本学学生たちが担いました。

学長 野島 稔

Minoru Nojima

東京音楽大学111周年企画の第一幕である、今回のオペラ公演。粟國淳先生の演出、広上淳一先生の指揮、そしてもちろん熱のこもった声楽の先生方の歌唱指導による舞台は、まさに「総合芸術」であり、本学の総合力の象徴だったと思います。

以前、マリア・カラスが初めてジュリアード音楽院の学生を指導するときに、ニューヨーク・タイムズのインタビューを受けて、「音楽において我われは皆学生です」と語っています。いつまでも音楽の真実を追求し続けるその姿勢に、私はとても感銘を受けたものです。そして、教員、学生の音楽への情熱が集束した今回の公演に、私は強いエネルギーを感じました。

本学は今、新たな未来に向かって歩み出しています。その舞台においても、すべての本学関係者が熱いスピリットを共有し、一つのゴールを目指して学び続けていくことを願っています。

■ソリスト

ミミ役（10月22日）

遠藤 紗千さん

声楽 大学院2年
静岡県立清水南高等学校卒業

これまでプッチーニの作品には、なかなかなじめず敬遠しがちでしたが、今回の粟國淳先生の演出を通じて、ミミはかわいさを売りにするあざとい女性ではなく、仲間たちを思いやることを知り、彼女やプッチーニに対してストレートな好感を抱くようになりました。自分が思っていたミミよりも、粟國先生が導いてくださった彼女のキャラクターのほうが私はずっと好きだったんです。また、指揮やコレペティトールといったさまざまな先生方から、自分が気づいていなかった数多くの課題を与えられ、それらを一つずつ消化していくことはとても有意義なことでした。その結果、作曲者からのメッセージを読み取れるようになった気がします。

私は一度社会に出てから本学大学院に進みました。本来、卒業後は一人で学ぶべきことを、本学で多くの先生方から享受できたことを、心から幸せに思っています。

ロドルフォ役（10月22日）

吉田 一貴さん

声楽 大学院2年
呉港高等学校卒業

全幕を通じて演じるのは初めての経験でしたので、オペラの難しさを実感したと同時に、自分は「歌い、演技することが本当に大好きなのだ」と改めて思いました。以前は「まず声が第一」と考えていましたが、実際に全幕通して舞台に立ってみると、作品への自分なりの解釈に基づく演技表現がいかに重要なのか、壮大な複合芸術としてのオペラの存在とその意味を、身をもって学ぶことができました。当初はロドルフォのミミへの「愛」をなかなか表現できなかった私は、「オペラで何を見せるのか？」悩み考える日々でしたが、夏の稽古の頃から「愛が見えるようになった」と粟國先生から言われた時のうれしさは忘れられません。

本学ではあらゆる方面の先生方から、まさに手厚く指導されます。その恵まれすぎる環境に甘んじず、音楽を自ら積極的に追求するスタンスを、今後も続けていきたいと思います。

■コンサートミストレス

金子 英梨歌さん

ヴァイオリン 大学4年
玉川聖学院高等部卒業

私にとってオペラの演奏は初めて。登場人物が同世代の芸術家たちでもあり、作品は理解しやすかったとはいえ、オーケストラの演奏にキャストの歌と演技が加わると、音楽の「間」が変わり、同じシーンでも別組のキャストだと、さらにそれは微妙に変化します。歌手の方々が表現しようとしていることを探りながら、その調整に戸惑い苦労しましたが、数多くのことを学んだ、とてもいい経験となりました。広上淳一先生は一人ひとり、すべての演奏者の存在と気持ちを考えた上で指揮されていると実感しました。演奏メンバー全員が、再びオペラに挑戦したいと切望していると思います。言語要素が加わる作品の演奏に参加したことで、ワンステップ上がった実感を抱いています。

あまり認知されていない「副指揮」の存在。舞台の袖で振り、決して客席からは見えず、カーテンコールにも並ばない黒子ですが、稽古時は「可能な限り立ち会い、テンポや演出上のきっかけなど、すべてを把握」し、本番時は「歌手やバンダが〝陰〟で歌い演奏する際、モニターで表のオーケストラの演奏を確認しながら、それとシンクロするように袖で指揮する」など、その役割は多岐にわたります。常に広上淳一先生が創り上げる音楽に溶け込み、先生の意図を理解し、〝陰〟の部分を引き継がなければいけません。そこにメインキャストや合唱団、オーケストラやバンダ、演出家や各スタッフ等、総勢100人以上の意志が絡み合います。さらには、稽古時からすべての要素を見ている副指揮であるが故に、部門同士を調整するコミュニケーション能力や本番時のトラブル対応能力をも要求されるのです。それらの重圧たるや計り知れないものでしたが、将来自分が指揮を担っていく上でも必ず必要とされることを十二分に知らされた、きわめて貴重な経験を今回の公演で積むことができました。

■副指揮者

浅野 将己さん

指揮 研究員
2016年大学卒業
学習院高等科卒業

西口 彰浩さん

指揮 大学院1年
栃木県立鹿沼高等学校卒業

指揮科の学生は、声楽専攻の方々とのかかわり、ましてはオーケストラ伴奏によるオペラ作品を学ぶ機会は少なく、演技や

■合唱

森山 綾子さん

声楽演奏家コース 4年
日本大学第三高等学校卒業

ソリストを目指している自分にとって、大学院の先輩方と一緒の舞台に立ち、オーケストラに合わせて演じることの楽しさと難しさを経験し、自分の課題と目標を見いだせたことに感謝しています。社会人講座の受講生の方々の表現もとても参考になり、演技が苦手な私は、当初は合唱の複数の役をこなすことに困惑しましたが、自分の考えで演技し、それを評価していただくことで、少し自信もつきました。学生時代から本格的なオペラを学び、現場の空気に接することができるのは、本学ならではの魅力。何かと多忙になる学部4年次ではありましたが、「参加できて本当に良かった！」と、今実感しています